

研究・調査報告書

報告書番号	担当
262	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Light drinking in pregnancy, a risk for behavioural problems and cognitive deficits at 3 years of age? 妊娠中の軽度飲酒は、3歳の行動上の問題と認知障害のリスクになるのか?	
執筆者	
Kelly Y, Sacker A, Gray R, Kelly J, Wolke D, Quigley MA.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Epidemiol. 2009 Feb;38(1):129-40. Epub 2008 Oct 30.	
キーワード	
アルコール、妊娠、行動、認知、小児、ミレミアムコホート研究(Millennium Cohort Study)	
要旨	
<p>背景： 本研究の目的は、妊娠中の母親の軽度飲酒と子供の3歳時の問題行動と認知障害に関連性を検討することである。</p> <p>方法： 全国的に前向きに調査を行ったUK ミレニアムコホート研究における、1次、2次調査のデータを用いた。妊娠中の飲酒パターンや、行動や認知機能結果は、インタビュー調査と家庭訪問にて評価された。問題行動は、行動の問題は、Strengths and Difficulties Questionnaire(SDQ)のparent-report版の臨床的カットオフよりスコアが高い場合とした。認識能力は、British Ability Scale(BAS)とBracken school Readiness Assessment(BSRA)から、naming vocabulary subscaleを用いて評価した。</p> <p>結果： 妊娠中の母親の軽度飲酒と、子供のSDQ得点と、問題行動、多動および情動性症状に関するSDQサブスケールの合計困難性スケールで高得点(カットオフ値より上)であることは、Jカーブの関連性があった。 軽度飲酒者の子供は、禁酒者の子供と比較してカットオフ値以上はやや少ない傾向であった。多量飲酒者の子供は、禁酒者の子供と比較してカットオフ値以上は多い傾向であった。少年は、1週間あたり週あたり、もしくは機会ごとに最大1-2回の飲酒習慣のある母親産まれた男児は、重大な問題行動(OR0.59、95%CI0.45-0.77)と多動(OR0.71、95%CI0.54-0.94)が少ない傾向にある。これらの効果はモデル調整後も認められた。 女兒は、情動的症候(OR0.72、95%CI0.51-1.01)と仲間との問題(OR0.68、95%CI0.52-0.92)禁酒者と比較して、少ない傾向であった。これらの効果はモデル調整後には弱まった。軽度飲酒の母親から産まれた男児は、禁酒者と比較して、認知能力スコアBAS0.15(95%CI 0.08-0.23)BSRA0.24(0.16-0.32)と高かった。BASのための差異は、社会経済的要因を調整時に弱まったが、BSRAの差異は、統計的に重統計学的に有意であった。</p> <p>結論： 週当たり、もしくは機会ごとに1-2回の飲酒習慣のある母親に産まれた子供は、禁酒している母親の子供と比較して、臨床的に関連した問題行動か認知障害のリスクが増加していなかった。妊娠中の多量飲酒者は、子供の3歳時に問題行動と認知障害が認められたが、軽度飲酒では認められなかった。</p>	